

優秀賞

ヴァイオリンの音色

イギリス ロンドン日本人学校一年 野村 美惺

各国で行われている、『ゴット・タレント』というイベントは、才能ある人が集まって、大勢の観客の前で発表をする大会だ。私はこの大会を見るのが大好きで、暇を見つけては、いつも妹と一緒にテレビ番組を見ている。天才達の発表は、凄いと思うものばかりで、いつも驚かされていた。

ある日、私はティラーという十一歳の少年の発表を見た。

「小さい頃にかんで死にかけ、それが原因でいじめられた。」

ティラーがそう言った時、私は自分よりも過酷な人生を送っていることに、とても驚いた。ティラーは誇らしげに舞台上に立っていて、いじめられるようには見えなかったからだ。音楽が始まって、最初のヴァイオリンの音色が、会場に響き渡ったその瞬間、私は耳を疑った。信じられなかった。私達の歳でも

こんな綺麗な音を出せる人はいない。ヴァイオリンのことについて何も知らない私も、この子は特別だと分かった。体を動かして、歩きながら演奏する姿が、一流の演奏者に見える。曲の歌詞を耳にした瞬間、私の目には涙があふれていた。死ぬほど辛いことが、人を強くする。実際に死にかけた年下の少年から、とても大きなものを感じた。私は勘違いしていた。彼は弱くない、強いのだ。過酷な人生を得て、他の人よりも凄いものを彼は持っていた。インタビューで彼は、

「『がんを患った子供』のまままでいたくなかった。だから僕は『ヴァイオリンを弾く子供』になったんだ。」

と言っていた。変わる勇気があるのがうらやましかった。彼は弱いけど、弱いままでいようとしなかったのだ。それは強いことの証じゃないか。私は、こ

んなに強い子を見たことがない。ティラーは、いけないのは弱いままでいようとすることで、弱いことはそんなに悪いことじゃない、と教えてくれた。

私は自分に自信が持てない。数学の問題が上手く解けなくて、挙手発言をして自分の考えを言うのが怖い、ネガティブ思考で、弱い自分に自信が持てなかった。だから、弱いのはそんなに悪いことじゃないと思ったら、気持ちが楽になった。ティラーの頑張ろうとする言葉に、生き生きと演奏する姿に、私は感動した。諦めないことがどんなに難しいか、私はよく知っている。そして、今まで自分が弱いことを理由に、逃げてきただけだと知った。誰だって挑戦できるのに、私には勇気がなかったのだ。

これは四月の話だ。あれから三ヶ月。私は大きく変わった。私には憧れの人がいる。誰よりも頑張れる人だ。今になって思うのは、挙手発言は簡単で、分からないことを聞くのは恥ずかしくない。学校は楽しいし、二学期はさらに頑張りたい。前に比べて、自分でも驚くほど気持ちが明るくなっていった。感動とは人を良い方向に変えてくれるもの。そして、私にとっての感動は、いつまでも、あのヴァイオリンの音色だ。

